表紙絵のこと

黒崎義介

山形の友人の女の子で、五才のとき父親と遊びに来て、何が気に入ったかそのままいつき、幼稚園もうちからで、朝小さい友だちと手をつなぎ、スキップしながら小鳥が囀るよう園にいく姿は、まるで花びらが散ってるようで、いつまでも門のところで手をふったものだ。

一年の入学で母親につれられて山形へ帰ってからの淋しさは、今でも辛かったことを忘れない。

二年生になる時、本人の意志でこちらの学校へあがるからお迎えにきて、というたどたどしいハガキをもらって、夫婦して鳥が飛び立つ思いで迎えに行ったものだ。

もう小学四年で大きくなったけれど、この子とある限り世の幸せを感じ、幼い頃の姿が今でも私の絵にいつも浮かんでくる。表紙の子どもも、その頃のこの子の姿です。

何をするにもあきやすく、衝動的で乱暴なところがある。友だちが訴えに来る相手は、八割までがRの名を持って来る。友だちの好き嫌いの調査結果も、A級の嫌われ者となっている。兄弟三人のまん中で、下の弟はまだ赤ん坊である。母は手の離せない状態で、愛情が行き届いていないようだ。Rの唯一のお得意は鉄棒である。それを知っているので、何回まわれるか皆と一しょに数えてやると、十八回続けて回転して、まだやろうとしている。その意気込みは、何か心のうっ憤を回転しながら発散させようとしているように感じた。それからはときどき思う存分Rに鉄棒をやらせることにしている。その時ばかりは、自信たっぷりで、楽しそうに見え、だんだん手荒いことをやる回数も減つてきた。

これらの諸性格の集合体である組の幼児たちは、幼いなりに自分の考え方を持ち意見を持っている。そして、それは自分の個性を通した見方、考え方である。ラジオのお話出てこいを聞いても、童話を聞いても、話の途中で、「こんなにしたらいいのに」「あんなにした方がいいよ」とささやきながら聞いている。それで童話をする時、私は、趣意を逃さぬように留意しつつ、幼児たちのささやき、つぶやきなどをなるたけ多く捉え、それを話の中にそっと織り込むことにした。そうすると幼児たちは、自分の考えていることが、話の主人公なり、その登場する事物に移行しているのを知って満足そうな顔をしている。そのように童話を媒介として、幼児それぞれの個性を通した考えを取り入れつつ、筋（プロット）を成長させていくように、私は今試みている。

とにかく個性芽生えの時であり、好ましい個性をのばす可能性をもっている幼児たちが、よりよき将来を獲得出来るよう、そして、より優れた社会生活が営まれるよう、親も、教師も、其の他の人びとも、正しい愛情をそそぎながら育んでゆかねばならない。

（熊本）